

マハトマ・ガンジーと仏教

ロケツシユ・チャンドラ
高橋正伸 訳

はじめに

ガンジーの光彩は、恐怖の炎と食欲の暗闇からかけ離れた信念と希望、理想と現実、成長と行動を具体化する真理と非暴力という言葉上のシンボルであり、生命の實在です。憎悪と不寛容の燃えさかる激動は、一極集中の権力の均一したグローバリズムを遠ざける智慧と平和の癒しを必要としています。銃と金の力は、多様な人道的秩序と相互に分かち合った尊敬に、とって代わられなければなりません。グローバル・プロゲ

ラムの口実のもとでの文化と文明の犠牲は、偉大なる生命の未来の希望を妨げています。

ウードロウ・ウイルソン（米国の政治家、第二十八代大統領）は、文明が「キリストの精神をもって広がるようになり、その精神から起こった実践によって自由になり幸福になってこそ救われる」と宣言しています。そのような条件付きの普遍性は、それ自体精神的な救済を必要とします。マハトマ・ガンジーは、それを美しく表現しています。「世界は享樂の大地ではなく、義務の大地でなければならぬでしょう」と。女流詩人サ

ロジニ・ナイドゥは、ガンジーを「人間主義の奉仕者となった偉大な慈悲の息子たちの直系の子孫」として評しています。

中国語での仏教詩 (J.M. Cohen, *The Rider Book of Mystical Verse*, 1983) には、「根源に戻れ、汝は目的を発見するだろう。心の内を見よ、即座に汝は見かけと無を征服するであろう」とあります。

人が心のもっとも深い部分に到達した時、その人の本質の崇高なる部分が力を与えられます。また同時にそれは深い洞察と幅広い見識をもった精力的な生き方であり、ガンジーは、「個人の生命の純真性は、正常な教育を構築するための一つの必須条件です」と語っています。ガンジーの祈りは、「オーム（ヒンドゥー教の三大神を表す祈祷語）、シャーンティ（平和、寂靜）、シャーンティ、シャーンティ」で終わります。初めのシャーンティは、外部における平和、自然との平和を意味し、次は地域社会と国家間における社会の平和、最後は自身の内面の平和を表しています。環境の平和、社会の平和、精神の平和、これら三つすべてが深く潜

在的に調和していくことにより、ことばにされず、行動に重要性がある、流れ静まる統一体もたらされるのです。人間の智慧と自然の静穩の融合なのです。

一 仏教との出会い

十八歳のガンジーがロンドンに到着したとき、神智学者の友人がエドウィン・アーノルド卿（英国の詩人）による『天来の歌』（ヒンドゥー教の聖典とされる宗教叙事詩『バガヴァッド・ギーター』の英訳）と『アジアの光』の二冊を読むように勧めました。『ギーター』は、ガンジーの「精神的な拠り所となる本」となり、ブッダの生涯と教えは、ガンジーを深く感動させました。

千百エーカーもの土地があったヨハネスブルグでのガンジーのトルストイ農場は、一人のドイツ生まれの熱心な仏教徒で裕福な建築家でもあったハーマン・カレンバッハ氏によって寄付されたものです。ガンジーは彼について、「強固な意志と厚い同情心と子どものような無邪気さをもった人だ」と評しています。

一九三〇年、ガンジーは、インドへ戻る途中、スイ

スに在るロマン・ロランと数日過ごすことにしました。ガンジーの訪問に庶民たちも熱狂しました。レマンの牛乳配達人組合は、「インドの王」にミルクを贈りたいと申し出たのです。ある日本人画家は、ガンジーのスケッチを描くためにパリから飛んできたほどです。ガンジーは、「ブッダはあらゆる世俗的な幸福を放棄しました。ブッダは、全世界にブッダの幸福を分かち合いたいがために、そして、その幸福というものが、真理を追究するために自己犠牲を強い苦惱している人々にもたらされることを望みました」と語りました。一九三八年、ガンジーは、彼の信奉するヒンズー教は偏狭な宗派ではないと宣言しました。それは、仏教を含む至上の宗教すべてを含んでいるということです。ガンジーは、一九四七年三月にデリーで開かれたアジア関係会議で、「アジアは頭をつき合わせるだけでなく、お互いの心を合わせなければならぬ。ブッダのような東洋の賢人のメッセージを理解し、偉大なメッセージを価値あるものにならなければならない。そして、現代世界にこのメッセージを伝えなければならない」と主張

張しました。一九四八年一月、ガンジーが、「全ての良心」を立ち上がらせるために行った断食を解くと宣言したとき、ウパニシャッド（古代インドの哲学書）の祈りとキリスト教の賛歌に続いて、パールシー教（インドのペルシア系ゾロアスター教）、イスラム教、日本の聖典が唱えられました。日本の聖典とは法華経のことでした。

二 法華経との出会い

ガンジーは、法華経がインドにおいて遺失したことにとっても興味をひかれました。彼は、法華経がどこかの田舎の家で、もしくはどこかの路傍の祠で、もしくはその他のどこかで見つかるはずだと思っていました。幸運なことに、法華経のサンسكريット語の原本がネパールに存在します。ガンジーは私の父に、「この法華経というのは何ですか」と尋ねました。私の父であるラグヴィラ教授は、「サンسكريット語の法華経をおもちしましょう。サンسكريット語の原本はインドでは見つかっていません。ネパールで発見され、ロシアにおいてサンسكريット語で出版されました」と語りま

した。父は、ガンジーに法華経の原本を英訳とともに贈呈しました。ガンジーは、「われわれが法華経をもたないでいる間、日本人はいかにして法華経を取り入れていったのか」ということを考えていました。そこで議論が起りました。日本人が法華経を尊崇することになったのはどうしてなのかを理解するために、法華経に目を通しました。そしてインドと日本に深い関係があることを実感しました。インドの革命家たちの拠り所となったのが日本だったのです。日本からマハトマ・ガンジーに会いに来たのは、軍国主義者ではなく精神的な日本人のみでした。

法華経のなかでガンジーが興味をもった点は、終始法華経が、僧、尼僧、在家の男性・女性信者について語っていることでした。ガンジーの心のなかには、女性性は男性とともに重要で等しい役割を担うべきだという考えがありました。カストゥルバ・ガンジー（ガンジーの妻）は、ガンジーが政治の世界で生きた人生全般において、ガンジーのそばにいました。ガンジーは、法華経のなかで優婆塞（在俗の男性の仏教信者）と優婆夷

（在俗の女性の仏教信者）が共に活躍していることを発見して喜んでいました。ガンジーは、日本人が男女平等を説いたこの経典を受け入れたことに喜びを感じていたのでした。ガンジーは、日本人の心を理解することを強く望んでいました。父は、社会もしくは国家の精神には多くの層があることをガンジーに説明しました。これらの深遠な層が国家の心であり、精神であります。権力構造は、これらの深遠なる層に対して全く関係がないということでした。私たちは、日本という国を政治的な権力とだけ見るのではなく、同じように文化的な存在として見ています。ガンジーは、人間の秩序の顕現のかぎになるものとして、法華経に確かなる面を見出していたのです。ガンジーにとってインドの自由とは、世界に愛と慈悲のメッセージをもたらしことでした。彼は、アジア関係会議での有名なスピーチでもこの点を強調しています。

マハトマ・ガンジーの使命は、全ての人々の涙を拭いて去ることでした。ある日、私の父がガンジーに言いました。「それは仏教的な考え方です。仏教の神である

観音菩薩は千の手と十一の頭をもっています。観音菩薩は世界の苦惱を見ました。そしてこの世界の人々をどうやって苦惱から救いだすかを考えました。観音菩薩の千の手にはそれぞれ目がありました。それらの目で民衆の苦惱を見ることができたのです。そして、その手で民衆を救ったのです」と。父はさらにガンジーに、「あなたは、人類の苦惱を和らげるためにあらゆることを考えている千の手をもつ観音菩薩のようです」と言いました。これを聞いたガンジーは喜びました。続けて父は、「日本人には千手観音があります。そしてそれらは慈悲の手であります。観音菩薩の慈悲は千倍です。観音菩薩もしくは千手観音は千の手をもつて苦惱を取り除きます」と語りました。ガンジーは、この観音菩薩のイメージを思い浮かべようと思いました。しかし彼はイメージをわかせることができなかったため、父は千手観音の絵を一枚、ガンジーに渡しました。ガンジーはそれを見て、日本人がそのような意義深い深淵な伝統をもっていることを喜びました。

セージを伝えていきます。仏教の三蔵は、一匹の猿が、ヴァイシャーリーの町でブツダに蜜を送ったことに関係しています。『見ざる』『言わざる』『聞かざる』のこれら三匹の猿は、生命の蜜、人間の心の蜜を所有しているのです」と語りました。

ガンジーはこの考えに大喜びしました。彼は、日本人がこれらの猿のほかに単純なシンボルをもっているのかどうかを知りたがりました。父は言いました。「私たちが千手観音を瞑想すれば、三つの実際的な要素が湧きあがってきます。つまり、慈愛あふれる微笑、慈悲心、そして千の手による奉仕の三つです。これらの三つの価値は日本の文化で大事にされています。そして日本人は、常にそれら三つの価値を全面的に受け取っています」と。日本の日常生活を豊かにするこれらの精神的涌現はガンジーに訴えかけました——美しい心をもった美しい人々——と。

池田先生の直観的な気質は、ガンジーと同じです。池田先生は、世界平和に向けて活動されるなかで、心の奥深くでガンジーの魂と共鳴しているのです。ガン

三 ガンジーと日本

禅式のような小屋にあったガンジーの簡素な机の上には、眼鏡と他の小物に加えて、三匹の猿がいました。これらの三匹の猿を通してガンジーの目の前には、常に仏教が存在していました。ガンジーは、私の父であるラグヴェイラ教授に尋ねました。「日本人はどうして三匹の猿に徳を秘めたのか。ラーマ神（ヒンドゥー教のビシュヌ神の化身の一つ）の帰依者であるハヌマーン（猿の勇士でラーマ神の臣下）に関係しているのですか」と。三匹の猿は、悪を見ない、悪を話さない、悪を聞かないということを象徴しています。いわゆる「見ざる」「聞かざる」「言わざる」です。ガンジーは、三つの見事な否定が猿と関連していることに興味をもちました。父はガンジーに、「インドでは動物は本能的な生き物であるために悪意のないものとされています。狡猾さがなく、調教もいらぬということを知っています。素朴な清浄さをもっているのです。そして悪知恵に束縛されていません。動物は簡単に申し分のない方法でメッ

ジーは、インドが真の自由を成就するため、アヒンサー（不殺生）の質的な価値を強調しました。それは意識を変革し、毎日の生活を高めるのです。父はガンジーに語りました。「東アジアにおける仏教の考えは、力と徳です。力を維持するために私たちは徳を必要とします。そしてこのことは中国人が仏教徒になった数世紀前までさかのぼります。それまでは、権力の集団としての国家でありました。徳は、精神的というよりもっと社会的なものでした。仏教の出現とともに、権力には精神的な徳が不可欠なものとなりました。権力はより深い特質をもつようになったのです」と。

四 むすび

聖徳太子は三つの經典を女帝に講義しました。法華経は生命の精神的な美として、勝鬘経は女性という側面について、そして維摩経は在家の現実を象徴していました。彼は、人間生命における精神性、女性の役割、在家の重要性という三点を強調したのです。ダルマは精神性を高め悟らせる経験でした。ちょうどこれらの

三つが日本の中心となったように、それらはガンジーにとっても重要なものでした。ガンジーにとって、独立を勝ち取った後の新生インドは、内面の泉に十分表れなければなりません。自由とは、政治的もしくは経済的なものだけではなく、私たちの内面性の深遠さでもあるのです。

法華経と法華経の精神が現代日本に根づいていることに、ガンジーは関心を示しました。もしガンジーが今日私たちとともにいるならば、池田会長に対するガンジーの印象は、深い共感へと動かされていることでしょう。

タゴールがガンジーにあてた手紙を見ると、「人間性」について理解することが出来ます。「私たちは、人間自身が編んだ網から人間を解放する義務があります」と。個々の自我が普遍的な自我に向かつていくとき、自尊心は消えうせ、一人の人間は、自己よりほかに広く論じて働きかけるのです。これは、創価学会の広宣流布、つまり価値システムの拡大にはつきりと見られます。人がその人自身を鍛錬するとき、そして、限らない生

命が存する広大な宇宙ではちっぽけな要素であるという事実をつきつけられるとき、その人は、無量の一部分となるのです。その人はもはや中心ではなく、生命のちっぽけな微光なのです。世界の一部として、彼は最適で崇高な秩序をつくらなければなりません。

広宣流布は、純真性の拡大、法華経の光の拡大なのです。この經典の題にはサツダルマ(妙法)とブンダリカ(白蓮華)の二つの要素があります。白蓮華は思考の純真性、行為の純真性を表しています。ダルマは宇宙を表現しています。つまり、人間は宇宙の秩序の一部であるということです。この普遍性のメッセージをひろげることは、人間の宿命の永遠性を再確認することです。宇宙の特質を受け入れることは、この普遍性を拡大することなのです。あらゆるシステムは、時代とともにより高度なシステムになっていかなければなりません。個人が社会秩序の責任を担っていると自覚するとき、その人は自分の世界に閉じこもることはありません。社会は国家への責任を果たさなければなりません。国家的責任はグローバルな規模でなければな

りません。そしてグローバルな視野は、より広い宇宙的な視野と拡大していかなければなりません。その視野は、世界的な価値を維持するために、永遠に広がっていかなければなりません。人間と自然の生命の生存に絶対必要となっていかなければなりません。人間は自然のなかで生存しています。自然は法界(ダルマダートウ)のなかで、宇宙のなかで生存しています。

創価学会の理想は普遍的な確実性のものであり、池田先生の偉大なる心が私たちの世紀を高めさせる力となっています。釈迦牟尼世尊はスッタニパータ(原始仏教聖典のうち最古の作品)とヴィナヤ(律)で、「比丘等よ、遊行せよ。衆生の愛愍のため、衆生の安楽のため、世間を愛するため、神々と人間との利益、愛情・安楽のために」と強く勧めています。釈迦牟尼世尊は、ひとつの範疇からより大きな範疇へと進んでいるのです。法の普遍性は、形式も精神もともに、初めも善く、中も善く、終わりも善いのです。聖なるものと普遍性は、ともに相伴ったものとなっていかなければなりません。池田先生の言葉は、価値の輪郭と自然の面に溶け込み、

混ざりあっています。それらは、偉大な賢人の心を特徴づける普遍的なメッセージです。池田先生は、哲人であって詩人であり、また詩人であって哲人でもあります。池田先生の業績は、美と高潔に満ちた満々たる生命の流れなのです。

(ロケッシュ・チャンドラ/インド文化国際アカデミー 理事長)

(訳・たかはし まさのぶ/創価池田女子大学 教育アドバイザー)